

軽度発達障害児の聴覚的文章記銘力に関する研究 : 学習障害児, 注意欠陥多動性障害児での比較検討(平成19年度心理科学研究科言語聴覚学専攻修士学位論文要旨)

著者名(日)	生田 真子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	3
ページ	156
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006871/

軽度発達障害児の聴覚的文章記銘力に関する研究—学習障害児，注意欠陥多動性障害児での比較検討—

生田 真子

〈目的〉

復唱により評価される聴覚的文章記銘力（以下文章記銘力）は言語能力の発達レベルの指標として用いられる。本研究では言語治療の立場から学習障害（以下LD）児や注意欠陥多動性障害（以下ADHD）児の文章記銘力の実態を調査し，健常児の文章記銘力の発達と比較する。また，文章記銘力と言語・認知神経心理学的諸能力（以下言語・認知諸能力）との関係を検討する。これらの結果から，文章記銘力を評価する意義，LD児，ADHD児の言語訓練における指導上の留意点を考察する。

〈症例〉

1996年から2007年9月末までの11年間に，藤本耳鼻咽喉科クリニック（岡山市）にて4名の言語聴覚士（以下ST）が言語訓練を行ったLD児11例とADHD児7例を研究対象とした。LD児11例の生活年齢は平均10歳1ヵ月，訓練開始年齢は平均4歳8ヵ月，訓練期間は平均5年1ヵ月であった。ADHD児7例の生活年齢は平均12歳5ヵ月，訓練開始年齢は平均5歳1ヵ月，訓練期間は平均5年11ヵ月であった（2007年9月末調査）。

〈研究の方法〉

文章記銘力は，遠城寺式乳幼児分析的発達検査，WPPSI知能診断検査，田中ビネー式知能検査Vの復唱課題を使用して，各検査のマニュアル通りに4名のSTが評価した。検査する文はすべてSTが口頭で1～2回提示し，こどもが正しく復唱できた文の語数を，そのこどもの生活年齢における文章記銘力とした。著者は，診療録からそれらの結果を抽出し，以下のことを整理・検討した。

1) LD児，ADHD児の文章記銘力の年齢別平均値を算出し，健常児と比較する。

2) LD児，ADHD児の文章記銘力は言語・認知諸能力とどのような相関関係があるのか，Pearsonの検定で相関係数を算出する。

〈結果〉

1) 健常児と比較すると，LD児の文章記銘力は1年～1年半ほど遅滞して発達し，7歳代で健常児と同じになった。ADHD児では1年～2年ほど遅滞して発達し，8歳代で健常児と同じになった。

2) 文章記銘力と言語・認知諸能力で，有意な相関があったものは，LD児では田中ビネー式知能検査のIQ，WISC-Ⅲ言語性知能検査「算数」課題，幼児・児童用読書力テストの「音節の分解」課題，ADHD児では幼児・児童用読書力テストの読書力偏差値，WPPSIおよびWISC-Ⅲ言語性知能検査「算数」課題，WISC-Ⅲ言語性知能検査「数唱」課題，WISC-Ⅲ動作性知能検査「積木模様」「絵画完成」課題，幼児・児童用読書力テストの下位項目「文字の認知」「語の理解」「音節の分解」課題であった。

〈考察と結語〉

LD児，ADHD児の文章記銘力の発達に影響する要因は，2つの障害に共通するもの，それぞれの障害に固有のものがあつた。年齢相応の文章記銘力を獲得させるためには，より早期に障害固有の認知的特徴を捉えて，言語・認知諸能力のうち有意な相関を認めた項目の能力を年齢相応に獲得させるよう留意した指導が重要であると示唆された。

〈主な文献〉

柴玲子，小林範子，石田宏代，鈴木牧彦，後藤多可志，紺野加奈江：未就学児における聴覚性言語性記憶の発達についての検討—Rey's Auditory Learning Test「小児版」作成にむけて—。高次脳機能研究，26（4）；385—395，2006。

石田宏代：特異的言語発達障害児の言語発達—臨床の立場から—。音声言語医学，44：209—215，2003。